

# 小松城跡発掘調査報告書Ⅱ

分譲宅地造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告書



2016.12

株式会社ますた不動産  
小松市埋蔵文化財センター

---

## 例 言

---

1. 本書は、分譲宅地造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、株式会社ますた不動産により実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当は次のとおりである。  
[調査地] 石川県小松市丸の内町  
[調査原因] 宅地分譲(造成工事)  
[試掘調査] 2016.9.5  
[試掘担当] 坂下義視、岩本信一  
[調査面積] 78m<sup>2</sup>  
[調査期間] 2016. 10. 11 ~ 2016. 10.14  
[調査担当] 下濱貴子
4. 発掘調査は、(社)小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けて実施し、遺構の実測は下濱が、石垣の平面図及び立面図作成は(株)太陽測地社が実施した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、現地調査完了後速やかに実施した。臨時作業員は雇用していない。

6. 遺構、遺物の写真撮影については、下濱が行った。
7. 本書の執筆・編集は下濱が担当した。
8. 本調査において出土した遺物及び遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市埋蔵文化財センターが保管している。

---

## 凡 例

---

1. 本書に示す座標は世界測地系(VII系)に準拠している。
2. 本書に示す方位は、全て座標北である。
3. 本書に示す高度は標高(T.P.)である。
4. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。

---

## 目 次

---

I 調査の概要	2
II 遺構と遺物	4
III まとめ	7
IV 報告書抄録	8

# I 調査の概要

## 1. 調査にいたる経緯

小松市丸の内町地内で計画された分譲宅地造成に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、株式会社ますた不動産より、平成28年8月1日付けで協議書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地(小松城跡)に含まれており、平成28年9月5日に試掘調査を実施したところ、造成工事範囲内に埋蔵文化財の存在することが確認された。

よって、造成工事取り付け道路予定区域における、埋蔵文化財が確認された78m<sup>2</sup>を発掘調査対象とした。調査費用は、造成工事を発注する株式会社ますた不動産の負担によるものとして、平成28年10月3日付けで委託契約を締結し、10月11日から埋蔵文化財発掘調査に着手した。

## 2. 調査の経過

当該地は試掘調査時から湧水がひどく、掘削深度も深いことから調査区維持が困難であった。そこで、調査日数を最小限に抑える手段として、検出した石垣に関しては写真測量図化を委託して実施した。

10月11日 重機による表土除去及び石垣検出作業。

10月12、13日 石垣検出作業及び写真測量実施。

10月14日 石垣掘り方確認作業及び手実測による補足図化作業。重機による埋め戻し作業を経て終了。現地の調査は10月14日にすべてを完了し、現地を引き渡し、速やかに報告書作成の準備に入った。

本調査の出土品整理は、埋蔵文化財センター職員が実施したものであり、整理作業員は雇用しなかった。

## 3. 本調査地と既往の調査地

- 1) 小松城は、梯川下流左岸標高2m前後の微高地に位置する。昭和の河川改修以前は小松城西側で大きく南に

流れを変えており自然の防衛線をなしている。小松城から流れの先約3kmで日本海の要津である梯川河口安宅に着き、城東には砂堤列上に小松の町並みを貫く北国街道が通じるといった、交通の要衝地であったことが窺える。

縄張りは、本丸周囲を郭が二重に囲むように、二の丸、三の丸、中土居、葭島、枇杷島、竹島、牧島・愛宕、泥町口が配置されている。東西約750m、南北約950m、面積約71haという広大な敷地をもつ。

寛永16年(1639)前田利常が隠居城として入城し、ほぼ新しい城に造りかえた(寛永の大改修)。現在は、本丸及び二の丸が県立高校小松高校校地、三の丸が芦城公園となっている。

2) 今回の調査では、小松城中土居の南北に伸びる方向の石垣と、堀の一部を検出している。第2図は、当該工事予定地の試掘トレンチと本調査区的位置図である。



第1図 小松城における調査履歴図

小松市教委(2015)第26図を改変・更新

a. 発掘調査(H11～16) 調査主体：石川県

b. 工事立会い調査(H20) 調査主体：小松市

c. 発掘調査(H21) 調査主体：小松市

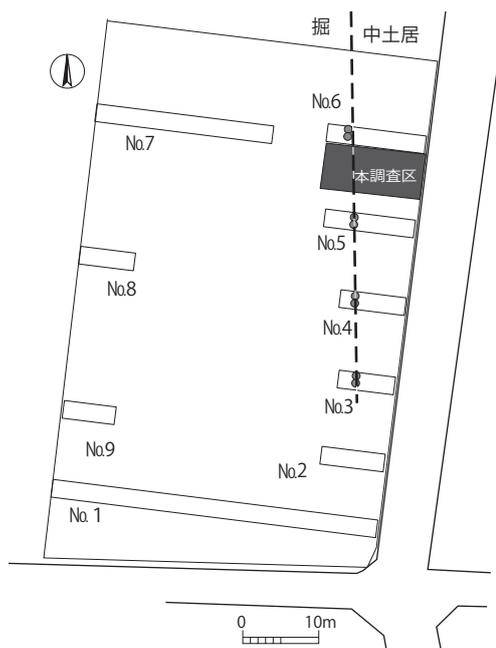
d. 本報告の調査区(H24) 調査主体：小松市

## Ⅱ 遺構と遺物

### 1. 発見された遺構 (第2～5図)

試掘調査の結果から、石垣は、工事予定地内に設定した試掘トレンチNo.3からNo.6にかけて検出しており、北北西から南南東に約40m伸びるものと想定される。またNo.2では、石垣が確認されなかったことから、絵図を勘案するとNo.2に至る前にL字に曲がり、確認されなかったものと思われる。

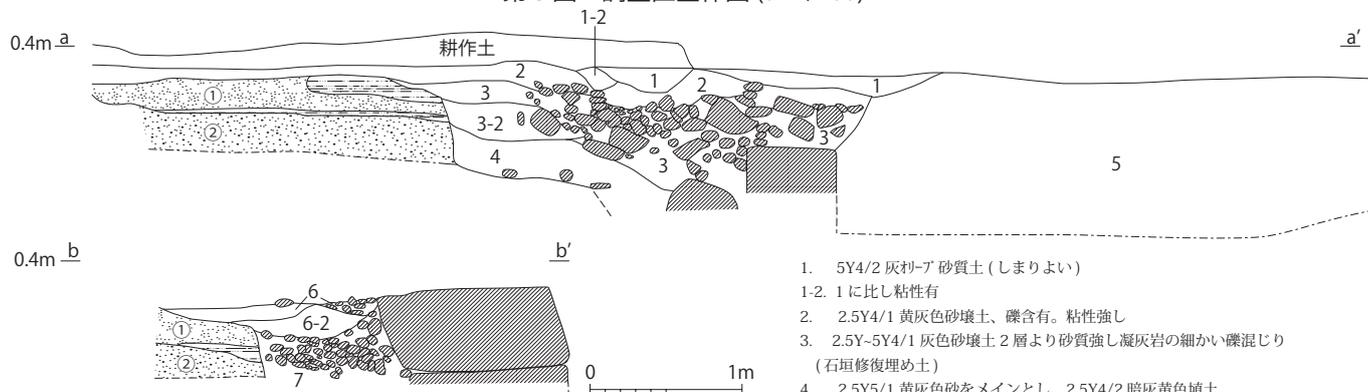
本調査区は、No.6の南に位置しており、南北に長さ6m、高さ1.2m部分の石垣を検出した。調査区は湧水が激しく、狭小な調査区でもあったことから、石垣を2段から3段確認できたものの石垣底までの確認には至っていない。現状で確認された検出面から堀底までは約0.9mであり、前述の報告(小松市教委2015)と同様に現地が蓮田化されるまでに少なくとも0.7m程度は削られていると考えられる。



第2図 調査区及び試掘位置図 (S=1/1000)



第3図 調査区全体図 (S=1/100)

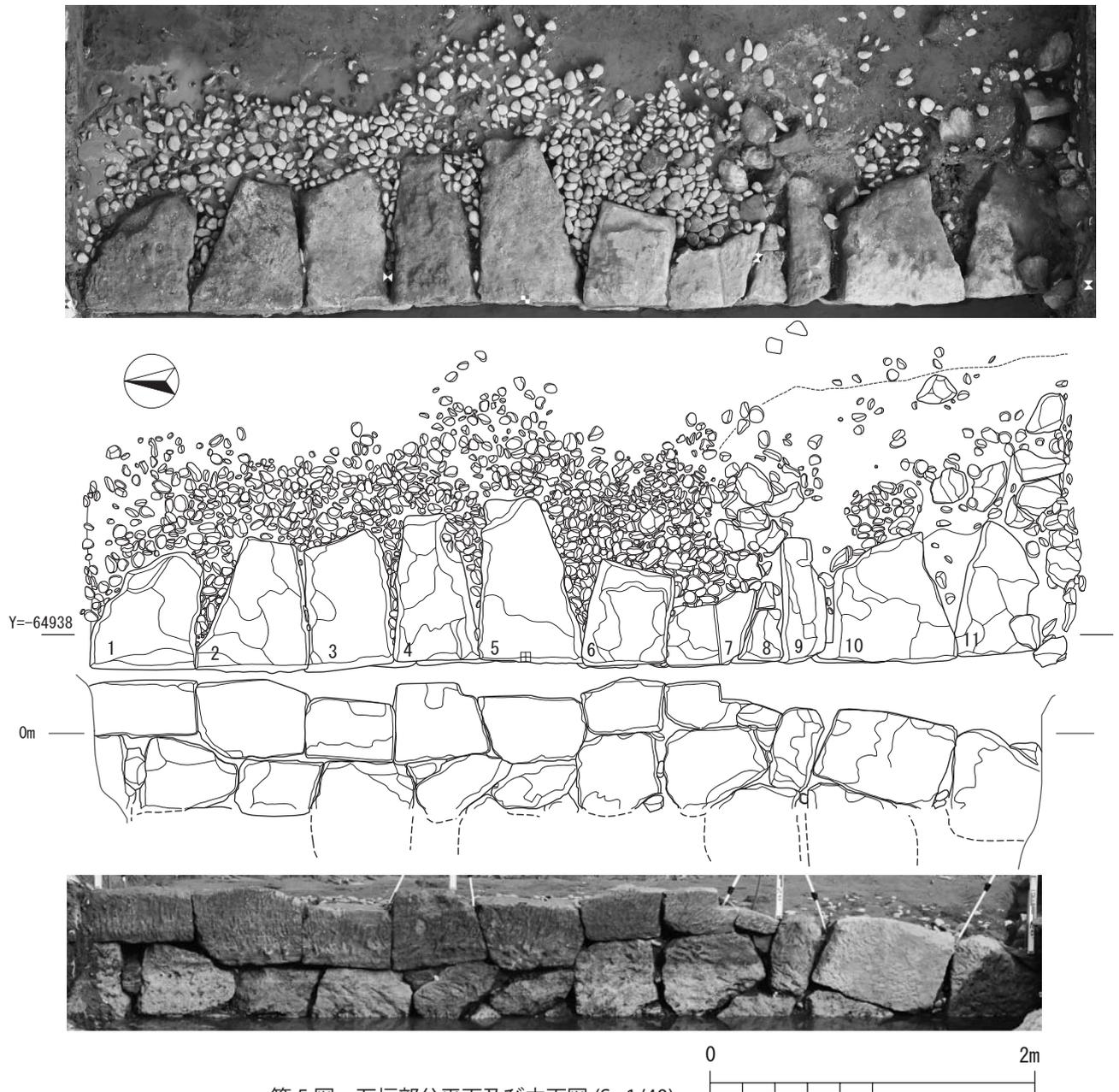


地山 ① 2.5Y5/1 黄灰色細砂をメインとし、2.5Y4/2 暗灰色植土が互層をなす  
② 2.5Y5/1 黄灰色細砂 (しまり悪い、湧水点)

1. 5Y4/2 灰砂-ア 砂質土 (しまりよい)
- 1-2. 1 に比し粘性有
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂壤土、礫含有。粘性強し
3. 2.5Y-5Y4/1 灰色砂壤土 2層より砂質強し凝灰岩の細かい礫混じり (石垣修復埋め土)
4. 2.5Y5/1 黄灰色砂をメインとし、2.5Y4/2 暗灰色植土 プラック及び礫混じり
5. 2.5Y4/1-3/1 黄灰植壤土 しまり悪く、礫混じり
6. 2.5Y4/2 暗黄色植土をメインとし黄灰色細砂混じる
- 6-2. 2.5Y5/1 黄灰色細砂をメインとし、植土少ない
7. 2.5Y5/1 黄灰色細砂

第4図 石垣断面図 (S=1/40)

石材は、確認された範囲ではすべて角礫凝灰岩製であり、7(第5図参照)は、L字に切り込まれ、それ以南は石垣が崩れており、石垣の積み直しであろうか。粘性ブロックとともに10cm角の凝灰岩を敷き詰めている状況を確認した。1～6の石垣範囲では、1.6mほどの掘り方に石垣を埋めた後、6cm程度のぐり石を敷き詰めている状況を確認した。なお、城内側については、遺構面等の確認にはいならず、すべて自然堆積である地山層であった。



第5図 石垣部分平面及び立面図 (S=1/40)



7切石 L字加工状況(南から)

石垣掘り方掘削状況(北から)

石垣修復部分検出状況(南から)

## 2. 出土遺物

工事予定地内から発見された出土遺物はすべて焼し瓦である。本調査区堀内からは3点の焼し瓦、平瓦2、丸瓦1点がみつまっている。試掘調査では、No.2トレンチから多くの瓦がみつかっており、耕土直下で平瓦8点、堀最下層からは一文字瓦1点、丸瓦1点、平瓦4点がみつまっている。図化したものは、本調査区堀内3点(1~3)、No.2トレンチ内耕土直下刻印資料(9)、堀内最下層資料(4~8)である。

軒丸瓦(5)は、瓦当がはずれた状態であり、採用された文様は不明である。瓦当との接着面には櫛目を施している。丸瓦凹面側には平織の布圧痕と縦に平行して入るスジ状の圧痕がみられる。

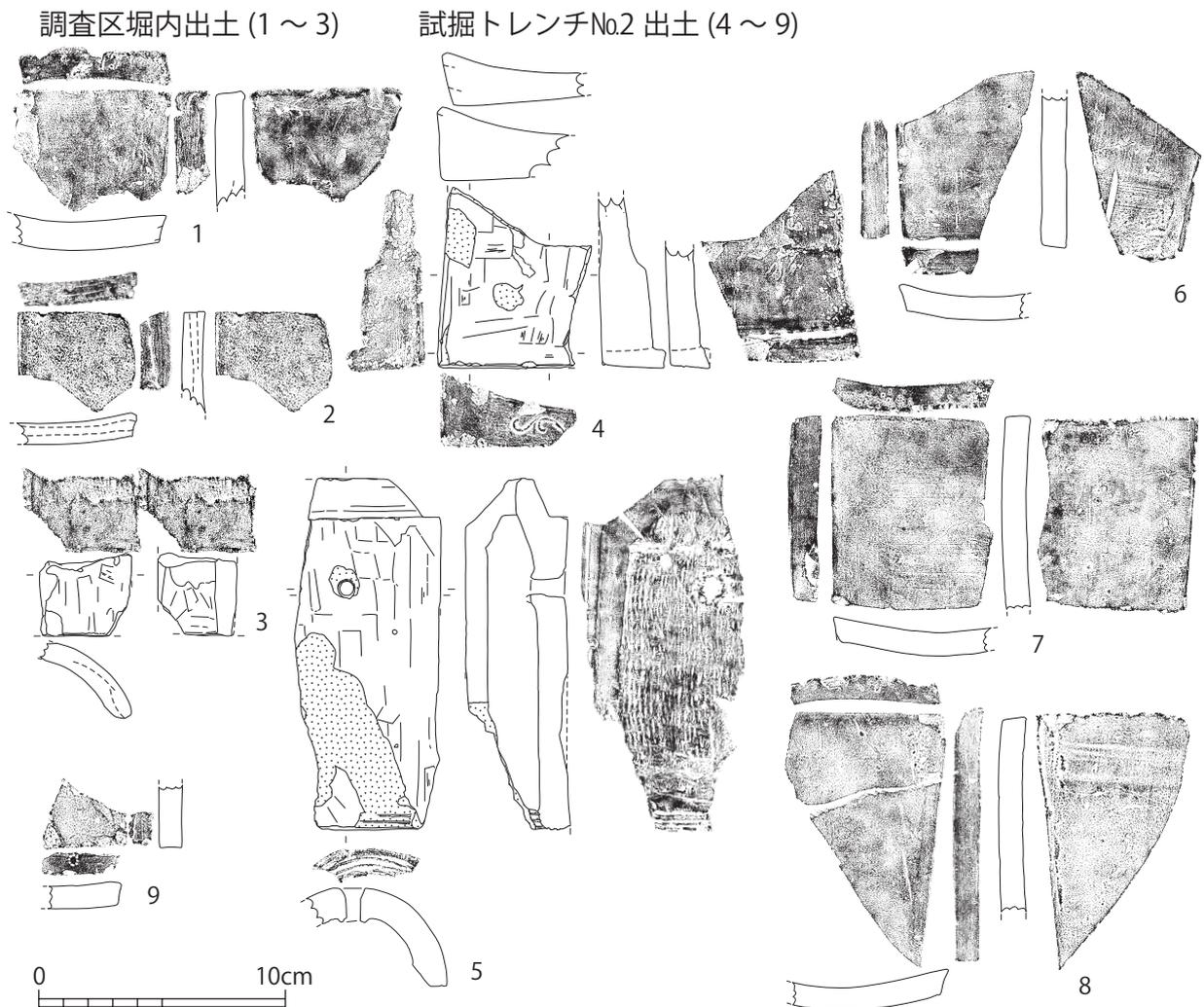
丸瓦(3)は右隅部片であり、凹面端部に面取りが施されている。胎土から日末産と考えられる。

一文字軒瓦(4)は、瓦当文様は、大川遺跡(小松市教委2014)第139図20に類似しており、瓦当面縁には段はなく平坦であり、一部唐草文が確認できる。平瓦凸面片側に粘土を足し肥厚させることで、瓦当面下端に直線を作り出している。

平瓦(1、2、6~8)は、すべて破片資料であり、全形がわかるものはない。その中でも7、8は10cm程度残存する遺存の良い資料である。厚みは2がもっとも厚く2.3cmであり、それ以外は約2.0cmを測る。

なお、胎土から2は日末産であり、図化していない試掘トレンチNo.2から出土した平瓦3片も同様である。

9は、平瓦で側面に刻印がみられる。日末産と考えられる。

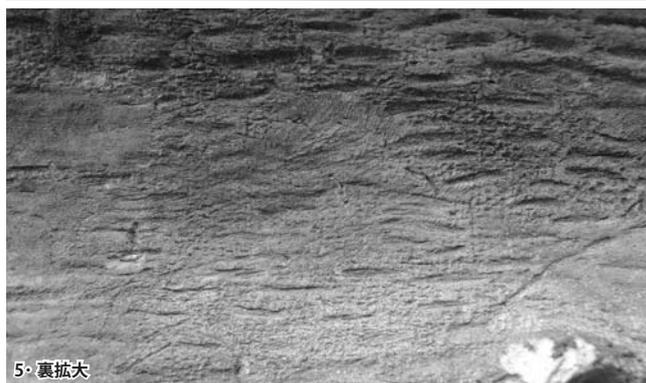


第6図 出土瓦実測図(S=1/6)

### Ⅲ まとめ

現状では小松城跡はごく一部の石垣以外、既に破壊されたものと認識されている。しかし、既往の調査及び本調査から基部のみであるが、絵図に近い形で石垣が地中に残存していることを裏づける形となった。今回確認された石垣は寛永期のもと考えられ、利常入城に伴う改修当初からのものと思われる。今後は、本丸櫓台のみの小松城石垣利用だけでなく、埋蔵文化財発掘調査の成果から場所や時期ごとの差が明らかになる可能性がみえてきている。

また、小松城跡に伴う燻し瓦は、採取資料等現状では少量であり、日末や蓮代寺窯の操業、小松城における瓦の使用状況、瓦の型式的変遷及び産地、製作技法など検証していくことは多く存在し、今後の埋蔵文化財発掘調査による成果に期待したい。



# 報告書抄録

ふりがな	こまつじょうあとはくつちょうさほうこくしょ 2
書名	小松城跡発掘調査報告書Ⅱ
副書名	分譲宅地造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
編・著者名	下濱貴子
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所在地	〒923-0075 石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713
発行年月日	西暦 2016 年 12 月 22 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまつじょう 小松城	いしかわけん こまつし 石川県小松市 まるのうちまちなかじま 丸の内町中島	17203	03156	36° 26' 36"	136° 24' 31"	2016.10.11 ~ 2016.10.14	78	宅地分譲 (造成工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小松城	城跡	近世	石垣、堀	燻し瓦	中土居の調査
要約	寛永大改修以後の小松城における初期石垣を検出した。				

---

---

## 小松城跡発掘調査報告書Ⅱ

分譲宅地造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成 28 年 12 月 22 日発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター  
石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713

印刷 マルト株式会社  
石川県小松市城南町 126 TEL (0761) 21-1223

---

---